

重くのしかかるこの問題を、われわれの内なる問題として認識し克服して行かねばならない。具体的な問題の解明と並行し、赤軍派、日本共産党革命左派の人々一諸になって、彼らの自己批判を助け、そして二度にこのような誤りを犯すことのないよう、われわれは努力しなければならぬ。われわれは決して失望したり、絶望したりしてはならない。ましてこの問題を曖昧にし階級闘争から離れて行くことは、自らの権利を放棄することであり、もしそのような人が一人でも出るといふことは、敵の思うつばにはまるものであり、われわれは決定的な敗北を喫することになる。われわれの進むべき道は、自ら武装することである。そして、「人民の軍隊とは何か」ということを、赤軍派、日本共産党革命左派の人々に真剣に考えることに努力しよう。それこそが死んでいった14人の同志たちに応えるたゞ一つの道である。

3・31ハイスマック二周年一銃撃戦万歳、故連日赤軍兵工追悼人民集会は、このような人民の考える、努力する場として、赤軍派、日本共産党革命左派の人々をはじめ、広範な人民の結集をもちこき、開催された。「連日赤軍の陣亡に敗北、そしてその誤りは、70年代の具体的な革命戦争へ転化・飛躍させるための生みの苦しみであった。私たちは、この事実を、明日の確実な勝利のための限りない教訓とし、更に前進するために、人民のみなさんの批判を仰ぎ、徹底して自己

批判せねばならない。その自己批判を徹底してやり切るため、私たちの自己批判に協力して欲しい。私たちは、死んでいった同志の共同墓碑を設立したい。そして二度にこのような誤りをくり返さないという、私たちの心の支えとしたい。」—赤軍派の同志のアピールは、如何に彼らが人民の軍隊建設のために努力して来たかを物語るものであった。

人民の言葉で、人民の生活を守り、人民の権利を獲得せんと前進する赤軍派、日本共産党革命左派の人々の自己批判運動を助けよう。そして敵権力の卑劣な階級闘争の矮小化、歪曲化攻撃のまっただ中で、広範な人民の結集のうちに、3・31集会を成功させた如く、われわれの不測の階級闘争を、人民の歴史を前進させよう。われわれは、更に力強く歩もう。一歩一歩確実に、故連日赤軍兵工と共に歩め！

72.4.1 一日本赤色救援会一

家族問題に関する我々の見解

「人質になられた方には申し訳ありません。しんでお詫びできることではありませんが、死んでおわびします。あとに残った家族をどうか責めないで下さい。」
連合赤軍兵士、板東国男の父君は、こう言い残して自殺した。我々は思う、家族を悲しみと絶望のどん底におとし入れた権力のあくどい守口と、そしてそれ以上に権力の有形無形の強圧を何一つ有効にはね返すことのできなかつた我々の非力を。

今回の同志殺しは、我々に、己れの病の何たるかをイヤという程は、きりと教えた。その病の中の1つ、(家族帝国主義病)について考えてみよう。これまで我々は家族の問題を、個人的な問題、プライベートな問題として処理してきた。(実質的にはセリ捨ててきた) それゆゑ、家もあれば何となく解決できたような気になり、家族帝国主義をうち破れ、なほと平気で息まいてきたのである。しかし、こういう態度は、24時間的であり、1日も早く改めなければならぬ。怪怖になっている現実があるとしても、だからといって即ち敵とあるとするのは、あまりにも左翼小児病的な態度である。

このような人民と一丸になって、「人民の闘いとは何か」、「人民の武装とは何か」、「人民の軍隊とは何か」ということを考え、人民の創造的な闘いの中から、豊かな共産主義的政治を、みちびき出さなければならぬ。「人民の武装」の問題を、「人民の軍隊」として体現せんと闘い、敗北していった連合赤軍の人々を忘れず、「人民の暴力」奪還の歴史を忘れず、武装闘争の道をつぎ進むことがわれわれの任務である。今、連合赤軍の同志殺しに端を築き、われわれの戦線は、非常な混乱に陥り、武装闘争に失望して戦線から脱落したり、闘いを放棄したりしていく人々がいる。しかし、三里塚・忍草・沖繩・水俣などで闘っている人々は、決して自らの闘いを放棄することはないであろう。なぜならば、自分がどのようなところに生まれ、育ち、そして生きてきたかを闘いの出発点としているからであり、抑圧されるものとしての階級性に目ざめているからである。われわれは自らの階級性を、より多くの人民の生きて闘いにぶれる中から、身につけるべきである。現在、日本階級闘争においては、人民の暴力、即ち人民の武装や抵抗の概念はいちじるしく歪められたものとして存在している。しかし、日本人民はあらゆる手段を駆使し、自らを武装して国家権力と闘った経験があるのだ。この事実をはっきり

りと確認し、われわれは、日本人民の魂の叫びとしてこの武装斗争の伝統を■うけ継がねばならない。オ一に、日本人民は、自らの生産手段、即ち、斧、鎌、くわ、竹槍、そして糞尿までをも武器に代えた。生産手段の武器化は、生産過程にいる人民だけの特権であり、それ故に、もっとも強固な武器となりうるのである。こうした農民の闘いの知識は、現在、英雄的に闘っている三里塚や、又草の農民にうつがれている。オ二に、敵の武器を奪い取り、自らの武器とした。この見事な例は、戦中の銃一万四千挺を、田畑荒らしの猪狩りのためと称してことごとく奪い取った又留米の百姓一揆や、自■由民権運動に見ることが出来る。オ三に、彼らは自らの手で武器を作った。百姓一揆の竹槍や、石投げ番、加波山における標槍製造がそれである。日本人民が、はじめて自らの手で武器を作り、人民の闘いを、組織された軍隊として編成し、権力の軍隊と「革命」の旗を翻しながら英雄的に闘った自由民権運動を、日本階級斗争の画期を切り開いたものとして、我々は、はっきりと教訓化しなければならぬ。オ四に、彼らは敵の中に味方を作り、あるいはスパイを潜らせることにより、敵を内部から撻乱させた。その例は飯田事件であり、幕末の草莽たりうである。オ五に、彼らは武装した人民を軍隊として組織し

努力をすることに他ならない。権力と我々の間に立って各方面からのさまざまな誹謗を一身にうけている我々の親兄弟姉妹も、又同様である。親、兄弟、姉妹の深い悲しみと苦しみをかかろうとしない"だけでなく、今すぐ、敵か味■方かと迫るような小心翼たる態度は革命家には無縁である。我々は親のために、兄弟姉妹のために、そして劣等感と絶望感にうちしめられた幾百万人民のために闘うのだ"ということも、しかなる状況のもとであろうと、つねに改たに思いおこさねばならない。同志殺しに裏うちされたものであることが、明らかにしてから、なお銃けき戦の中に革命性を見いださんとす全国の心ある同志たち、友人たちに応えること、そして仲間殺された無念の同志たちを心から追悼することは当然にも一つである。即ち、我々自身が人民の魂にうけわたる真の共産主義政治を獲得することであり、より具体的には、まず我々自身の団結の中味を総点検し、その作業をおし進める中から新しい武装斗争のスタイルを確立することであると考へる。

この間、獄中の同志諸兄■姉より、「銃けき戦の展開時における家族対策がなまざりにされてきたのではなうか」というような

はっきり敵であるとわかっているもの以外に、なしては、飛躍のためのあらゆる援助と支援がなされなければならぬ。しかるに、数十年間、日の丸の旗の下であの戦后を生き抜いてきた親たちのことを、我々は、「もともと世代が違ふのだから」といってなまざりにしてはこなかつたろうか。親と自分との間に本当の人間関係を築こうとして、どれほどの努力をしたであろうか。親として子を想えば、想うほど、世間流の幸福から遠去かかっていく我が子を見ていたたまれないう気持ちになるのは、親の立場からすれば当然であろう。人生■経験の豊かな親たちにとって、自分の人生観だけが絶対であり、ゆるぎないもののように見えるのも、当然であるかもしれない。しかし、我々は生きているのだ。自分たちにしてきた苦勞に本当の真理がないのを、親たちは無意識の中で、わかっているのだ"ということも、人類を解放するための闘いに苦しんだのではなく、人類をイヤイヤ作らにせよ抑圧してきたその苦しみであったことを、親たちはわかっているのだ。なぜなら、親たちはいつも我々に言うのである、「我々のような苦勞だけはさせたくない。」と。

階級形成とは、苦しんでいる全ての人間の立場にたち、一緒になってその苦しみをのりこえる

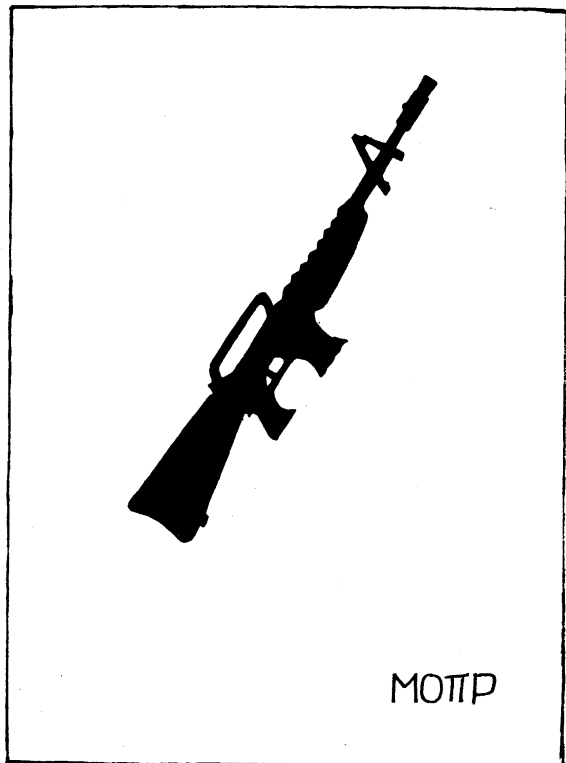
指痛が相ついであった。我々は、これについて充分なし切れなかったこの自己批判と、今后、このような問題を、どのようにして解決してゆくのかを考へ、よりの確かな活動をしてゆきたいと思う。我々が家族と話ししていく内に、非常に困難に思つたことは家族に対するとりわけ父親の社会的基盤に対する権力の圧力であった。これは有形無形のあらゆる形態をもって家族を怖かし、あさま山荘への呼びかけも、自分たちの息子がいるかもしれないという推測の段階ですら、行わざるを得なかつた。又、我々も、家族の基盤をなくすような危険をおかしてまでも、呼びかけを阻止することはできなかった。家族の方々も、自らの思想を否定することなく、むしろ積極的にかわり、現場の呼びかけでも、「私はあなたを信じている。……ここをあなたの死に場所と決めたからには、り、ばに死んでほしい。」という主旨の内容で話されている。しかし、権力は、これすらも口封じし、放送を中止させ、一晩がかりで「誤傳」した上、翌日は全く違つた内容で話させている。わたしたちは家族の方々を事前に安全な場所へ移し、保障するということはできなかった。これは深く自己批判しなければならぬ。しかし、今後の問題として考へる

ならば、家族をいかにして我々総体のものとするかであり、通常よりの私たちの親に接する時の内実を基本として、その横のつながりとして、家族会が設定されると考える。それ故、家族会は「過渡期の形態」として設定されるべきだが、現実的には個人として接し切れない場合も、同様の立場にある家族との会話は成立するといふ事も考えられ、かなり重要視する必要があると思う。今后は、家族会を強固なものにしてゆくと同時に、私たち赤色救済会と家族会を密接なものにしたいと考へます。

人民の斗いに学ぼう

革命運動発展の法則は、「広はんな人民の支持」を得ることであり、これが今、我々に一番問われているのである。ために我々は、そのために一生けん命斗ってきた。しかし、連合赤軍の斗いと敗北に象徴的にあらわれたように、我々の「武装」と「団結」はあまりにも一人よがりであった。われわれは、目を広げなければならぬ。三里塚・忍草・沖繩・水俣などで勇敢に斗っている多くの人民に、大いに学ばねばならぬ。そして、われわれは

その例は、秩父蜂起や、百姓一揆など数多くあるだろう。しかし、こうした高度の質をもつ人民の斗いは、確かに地域的規模では一定の勝利的展開をしながらも、ついに全人民のものになることがなく敗北していった。その原因は、全国の運動を集中し、確実に敵を打倒する組織された党と軍がなかったということである。自由民権運動もそうだった。そして、単一の階級斗争の敗北過程が、そうである。われわれは、人民がもくもくと斗い、次第にその斗いの質を高度化し、りこうになっていったにも拘らず、ここで遅れていたのは、党であり、社会主義者、共産主義者であったということも、はきり確認してみなければならぬ。従って、このように、着実に一歩一歩前進する日本階級斗争の歴史を、人民の偉大な斗いを、真に教訓化することが、われわれの進むべき道である。この度の我々の斗いがあまりにも一人よがりであったことを厳しく反省し、人民の斗いに学び、人民と一丸になって、人民の武装の正当性を防衛し、武装斗争への広範な人民の参加を待ち、いかになければならぬ。今、達成しなければならぬのは、武装斗争の必要を人民が自ら発見することである。豊かな共産主義政治を身につけ、全人民の団結のもとに、人民の戦争——武装斗争の土壌を創出せよ！（72、4、21）



331日二周年

と き 三月二二日
 五 じ 半 九 じ
 と こ 馬 谷 区 民 会 館
 銃 撃 手 戦 万 才
 故 連 台 赤 軍 兵 士 追 悼
 人 民 集 会
 催 日 本 赤 色 社 援 会
 HJ 裁 判 斗 争 支 援 委
 主 大 普 權 破 防 法 裁 判 斗 争 支 援 委